

はじめに

この物語は全国の児童相談所で日々、子どもとその家族を支えるために、必死で頑張り続けているケースワーカーや、児童心理司に対するオマージュである。

児童虐待に関する痛ましいニュースが、マスコミで取り上げられるたびにその名が登場する「児童相談所」。しかし、児童相談所がどのような機関で、どのような仕事をしているのかという詳細については、ほとんど知られてはいない。

我が身を顧みず、身を粉にして働く児童相談所職員の直向きな仕事に対する姿勢や、蓄積された独特の相談技術。そして、プロフェッショナルとしてのプライドに満ち、どんなに辛い状況に直面しても決して諦めることなくクライアント（相談者）を支え続けていくという信念。児童相談所の職員は、そんな愛情に満ちた奮闘を続けてきた。

しかし、増え続ける虐待通告により沸騰状態にある今日の児

童相談所において、職員たちはもがき苦しんでいる。彼らの苦しみは、単に虐待の急増による肉体的な疲労から生じているだけではない。最も彼らを苦しめているのは、キャパシティをはるかに超えて押し寄せる膨大な数の虐待通告により、福祉専門機関として彼ら実践してきた、クライアントとしっかりと向き合い、共感しながら丁寧に行うケースワークができないという悔しさなのだ。

私は、そんな彼らの苦しみを目の当たりにし、彼らが本来熱望している熱いケースワークの物語を綴ろうと思った。なぜなら、日々、忙殺されながらも、彼らが胸の奥で必死に守り続けようとしているケースワークの魂を呼び起こし、児童相談所が本来行うべき「心のケースワーク」の原点を思い出すことこそが、今の困難に立ち向かう最善の方法だと信じるからだ。

この物語が、全国で働く児童相談所の職員を勇気づけ、児童虐待を少しでも減らすことに繋がっていくことを切に願う。

二〇一六年七月

安道 理

走れ！
児童
相談所

目次

はじめに	2
人事異動	8
言い知れぬ憂鬱	12
ケースワーカーとして	53
小さな手のひらのために	70
初回面接への道	82
ロールプレイ	110
魔術師	122
戦慄の家庭訪問	145
頼れる女	159
職権一時保護に向けて	168
揺れる思い	178
SOSAを使え	184
悲しい虐待	206
クリスマス・イブの立ち入り調査	246
走れ！ 児童相談所	273
おわりに	306

里崎聡太郎

一般行政職として県庁に勤務していたが、人事異動に伴い福祉専門職中心の児童相談所で働くことに。持ち前の熱い心を唯一の武器に、ケースワーカーとして、一人の人間として成長していく。

田丸真理子

里崎と同期入庁の福祉専門職。姉御肌あねごはだで気は強いが、優しい心の持ち主。現在、児童相談所を管轄する本庁の児童家庭課に勤務。里崎の良きアドバイザー。

緑川桐子

児童相談所に勤務する福祉専門職。田丸にケースワーカーとして鍛え上げられた実力派。里崎の天敵。

後藤 桜子

緑川と同期の福祉専門職でやはり田丸に鍛え上げられた一人。長閑のどかな口調とは裏腹な実力派。里崎の天敵2。

長谷部課長

どんな状況にも決して動じない、まさに鈍感力の人。里崎を温かく見守る存在。

司馬係長

児相の理論的支柱のような臨床心理士。シニカルで冷めた口調が特徴。しかし、心の中は誰よりも熱い思いが詰まっている。

中山係長

児相の若手ケースワーカーのまとめ役。クライアントの状況を見抜く鋭い洞察力の持ち主。長谷部の右腕的存在。

前山次長

児相一筋三十年のベテラン。あらゆるケースを経験した生き字引。

東村所長

里崎と同じ一般行政職。穏やかな性格だが、児相が組織として行ったことはすべて自分が責任を取るという気概を持っている。

人事異動

「動いてるぞ、里崎。希望してたのか？」

「動いてるって、僕が異動してるってことですか？ 冗談でしょ、吉田さん」

県庁においては、毎年三月末のある日、翌年度の人事異動が一斉に発表される。一般的に県庁の事務職員は、二年から四年ごとに人事異動に絡み、その都度、違う職場に配属され、四月一日からは、前日までと全く違う業務を淡々とこなさなくてはならない。

「白々しいな。最近の若いのは忙しいとすぐに本庁から逃げてくんだからな。出先でゆっくりしたいってか」

「異動の希望なんてしてませんよ！ 本当に異動してるんですか？ 観光課に来てまだ二年目ですよ。それに、今、蓮華山への外国人旅行者急増計画を考えてるところなのに。吉田さんだって、僕がこの事業をどれだけ必死に作ってきたか知ってるでしょう！」

「はいはい。まあ、ともかく異動してることは間違いないから、ちゃんと仕事の引継書作っとけよ」

「それより吉田さん、僕は一体どこに異動してるんですか？」

「どこって……なんだここ、聞いたことねえな。三和県中央子ども家庭センターだとさ」

「中央子ども家庭センター？ なんの仕事してるんですか？」

「お前、馬鹿か？ 聞いたこともねえ出先が何やってるか知るわけねえだろう。まあ、子ども家庭センターだから子どもと家庭に関する仕事すんだろ」

「見たままじゃないですか。吉田さん、もう主任クラスなのに本当に聞いたこともないんですか？ 中央ってことは同じようなセンターが県内にいくつかあるのかなあ？」

「さあな。ただ、名前からすると、保健福祉部だろうな。子ども家庭センターだから、児童家庭課の出先だったりして。さすがに安直過ぎるか。はははははは」

まったく、どうして今年俺が異動に絡むんだよ。異動の希望なんて一言も口にしてないのに。課長も課長だ！ この前、人事ヒアリングの際に、この仕事にどれほど熱意を持っているか、あれだけ強く伝えたのに！ こんな中途半端な状態で仕事を放棄させて、出先にほっぽり出すなんて！ しかも、子ども家庭センターって誰も聞いたこともないような出先に……。人事課もどうかしてるぜ！

里崎は理不尽な異動に強い憤りを覚えた。

「里崎さん、児童家庭課の田丸さんから電話が入ってますよ。そっちに回しますね」

田丸は里崎と同期入庁の福祉専門職だ。胆力がある勝ち気な女性で、なんでも率直に意見を言うタイプで里崎とは馬が合い、入庁以来の友人である。

「はい、さとむ……」

「ちょっと、どういうことよ！ 事務屋のエリートがなんで児相に配属されてんのよ。児相がどんなとこだか知ってるの？ 私たち福祉専門職でも覚悟のいる職場なのよ。福祉の仕事も興味があるっていうのは聞いてたけど、どうしてよりによって児相を希望したりしたのよ！」

マシガンから放たれた弾丸のように、怒りの言葉が受話器を突き破ってきた。

「田丸、田丸、落ち着けよ。ちょっと、ちょっと俺の話も聞けよ」

「何よ、早く言いなさいよ」

「田丸、あのな、さっきからお前、ジソウ、ジソウって言うけど、そのジソウってなんのとだかさっぱりわからないんだけど……」

「児相って何って馬鹿じゃないの！ 児相っていったら児童相談所に決まってるでしょう！ 自分で希望したのにそんなことも知らないの？」

「田丸、田丸、待て、ちょっと待て。頼むから落ち着いてくれ。まずはじめに、俺が異動したのは、児童相談所じゃなくて、三和県中央子ども家庭センターってところだ。だから、今お前が興奮している児童相談所には異動していないということをまず理解してくれ。それから、俺は異動の希望は出してないんだ。俺自身、異動したことに驚いてるんだ。だから、俺が望んだ人事じゃないってことも理解してくれ。わかったか、わかったか？」

「もう、何言ってるのよ！ 中央子ども家庭センターっていうのが、いわゆる児童相談所のことですよ。あんた本当に何も知らないの……？ 異動の希望も出してないって言ったわよね、今……。あつ、そうだ、庶務があつたんだ。あははは……。ごめん、ごめん。私の早合点だわ。ごめん。ちょっと怖かった？ だつて、事務屋のくせに児相に希望を出したのかと思っ**て**びっくりしちゃつて。あんたちょっと変わったところあるから。ふふふ。ごめん、ごめん。忘れて。じゃあ、庶務頑張つてね」

「……」

忘れて……。あんなに興奮して電話をしてきておいて、自分で勝手に納得して忘れてつて言われてもなあ。田丸のあのあせり具合は尋常じゃなかったな。普段すごく冷静なのに。ずいぶん驚いてるというか、心配してくれてるようだったけど……。

里崎は田丸らしからぬ感情の乱れた電話を訝しく思った。

要するに、子ども家庭センターの庶務以外の仕事を俺がやると思って心配して電話してきたことか。でも、逆に考えると、子ども家庭センターで事務屋の俺がする仕事は、庶務以外に考えられないってことだよな。だから、田丸は勝手に納得したわけだし……。まあ、どうでもいいか。どうせわけのわからん出先だし、大した仕事をさせられることもないだろう。あーあ、この前までモチベーションも高かったのにな。庶務なんて経験済みだし。モチベーション維持するだけでも大変そうだ。何にしても、これ以上ごちゃごちゃ考えるのは非論理的で、時間の無駄なものか。子ども家庭センターの業務については具体的な情報も少ないわけだし。

田丸からの不可思議な電話に多少の不安は残ったが、情報の少ない現状で、これ以上取り留めもなく考えを巡らすことは、里崎には無意味に思われた。

実は、人事課が里崎を児童相談所に配属した理由は、里崎のこの性格に着目したからなのだ。里崎という男は、大らかで、心が熱く、感動しやすいという一面と、物事を論理的に考え、難しい局面に直面しても、状況を冷静に整理し乗り越えられるという一面を兼ね備えた、複雑で面倒くさい男だった。しかし、適度に自分の感情を放出もできるし、難局には論理的に向き合えるこの性格は、とてもストレスに強いという特性を持っていた。

普通の人間なら、田丸からあんな不可思議な電話をもらえば、児童相談所という職場は一体どんな仕事をする所なのかと不安に感じ、誰彼構わず聞きたくなるものである。しかし、里崎は自分なりに勝手に状況を分析し、十分な情報がないと判断してしまうと、それ以上にディテールを気にしたりはしないし、過度の心配もしないのである。

人事課はかねてより、児童相談所から、福祉専門職が足りないなら、事務職でもいいからストレス耐性の高い屈強な男がほしいという強い要望を受けていた。そこで、人事課が白羽の矢を立てたのがこの里崎であった。つまり、人事課は里崎が思っているよりずっといい仕事をしているのである。

そして、この人事異動により、里崎はそれまでの人生で経験したことのないような強大なストレスと、大きな感動の波にもまれる、新たな生活をスタートさせることになる。

そう、彼が全く知らない、児童相談所という地方公務員の職場としてはきわめて特殊で、異質な世界の中で。

言い知れぬ憂鬱

いよいよ、四月一日。里崎が新しい職場である三和県中央子ども家庭センター、つまり、児童相談所に着任する日がやってきた。

アパートのドアを開けると、爽やかな春風が里崎の頬を撫でた。向かいの土手にある桜の大木は今まさに満開を迎えている。柔らかな朝日の中を薄桃色の花びらが右へ左へと舞う姿は、何と

も心を和ませる美しい景色だった。いい朝だ。里崎は、そう思いながら車のエンジンをかけた。児童相談所は県庁より北に8キロほどの静かな郊外に位置している。里崎は、アパートを出発して半時間ほどで新たな職場に到着した。

鉄筋コンクリートの二階建てで、壁は薄いダックエッググリーンで塗装されている。建物はまだ新しいらしく、塗装の剥げた部分や、クラックは見当たらない。

正面入り口の自動ドアの前で、里崎は一つ大きく深呼吸をした。異動初日は、誰しも多少は緊張するものだ。どんな職場で、どんな面子が仕事をしているのか、行ってみたいことにはわからない。

たかが出先で庶務をやるだけだが、初日は緊張するもんだな。いい職場でありますように。里崎は心の中で小さくそう呟いた。

しかし、そんな里崎の勝手な予想はいきなり修正を余儀なくされる。

「おはようございます。四月からお世話になる里崎です」

「ああ、里崎さんね。観光課から来た」

「はい、そうです」

「じゃあ、里崎さん、二階に行ってください。相談課長が所長、次長に紹介してくれますから」

「相談課長ですか？ 僕は総務課付きでは？」

「違いますよ、里崎さんは相談課に配属されています。二階に行ってください」

総務課にいた中年女性は、とても事務的な口調で里崎にそう伝えると、そそくさと部屋の奥に引っ込んでしまった。

おかしいな。田丸の話だと、俺は総務課で庶務をやるはずだったのに。相談課にも事務屋の仕事が何かあるということか……。まあ、二階に行きやあわかるか。

里崎は少し不審に思いながら薄暗い階段を上がっていった。

「おはようございます。里崎と申しますが。相談課長さんはいらっしゃいますか？」

「ああ、ちょっと待ってくださいね。課長！ 里崎さんが着任されました」

部屋の奥に座っていた五十歳前後の女性が、その声かけに反応して立ち上がった。赤いフレームの洒落たメガネをかけた、とても優しそうなその女性は、ひまわりを彷彿させるような笑顔をたたえながら、里崎に近づいて来た。

「あら、里崎さん、来てくれたの。どうもはじめまして、相談課長の長谷部です。いやあ、里崎さん、背が高いし、体もがっちりしてるからいいわ。良かったわ。うちは男の人が少ないから、いろいろ困ってたのよ。助かるわ。所長と次長を紹介するわね。所長室に来てくれる」

「あ、はい」

なんで体がでかいといいのかな？ 別に肉体労働してる雰囲気もないのに。それに、課長を筆頭にずいぶん女性が多い職場だな。男は係長級が一人と兵隊二人の三人か。女性は課長、係長級を含めて十四人、まさに女の園だなこりゃ。てことは、ここの仕事を支えているのは女性ってことか。だったら、どうして田丸はあんなに心配して俺に電話してきたんだろう。わかんないなあ……。まあ、いいか。

里崎は改めて田丸のかけてきた電話の内容に不可思議さを覚えていた。

所長室では、昔話に出てくる正直爺さんのようなグレーの髪に、優しさ溢れる目をした小柄な

男性と、野武士を思わせるような眼光鋭い大柄な男性が待っていた。

「里崎さん、はじめまして、所長の東村です。里崎さんは事務屋さんでしたね。慣れるまではいろいろ大変だと思うけど、私も同じ事務屋で何とかやっていますから、頑張ってくださいね。困ったときは、次長の前山さんに相談するといいですよ。前山さんは児童相談所歴三十年の超ベテランですから」

正直爺さんの後ろに控えていた野武士が一步前へと踏み出した。

「こんにちは、次長の前山です。人事課に要求してたとおりの立派な体格の人が来てくれて喜んでいます。まあ、ハードな職場ですが、里崎さんならできると思いますからしっかりと頑張ってください。仕事の内容については、長谷部課長から聞いてください。では、期待してまずからよろしくお願ひします」

「はい、頑張ります」

えらく優しそうな所長と、ずいぶん頑固そうだけど、純朴な笑顔を見せる次長だな。この二人は信頼できそうな気がする。前山次長はハードな仕事って言うけど、その割に長谷部課長は妙に明るいし、なんとも楽しそうに笑ってるよな。どんな仕事をするのかかわらないけど、課長もい人そうだし、職場としては快適そうだな。

新しい職場の面々の優しそうな雰囲気は、里崎が抱いていた漠然とした不安感を和らげた。

「じゃあ里崎さん、みんなに紹介するから来てくれる」

「はい」

里崎は、長谷部課長に続いて所長室を出た。所長室のドアが閉まりきらないうちに、長谷部課

長は所員に向けて里崎の紹介を始めた。

「みなさん、観光課から、うちのセンターに着任された里崎さんです。里崎さんは事務職なので、うちの仕事はあまりわからないと思うから、みんな十分フォローしてあげてくださいね。頼みますよ」

「里崎です。一生懸命頑張りますので、よろしくお願いします」

なんか、みんなむちゃくちゃウェルカムっていう笑顔だな。それにしても、作り笑顔って感じの人が一人もいないのが、逆にすごく違和感があるんだけど。普通、大人があんな屈託のない笑顔するかな。どうも、今までの職場と違うんだよな、雰囲気ふんいきが。

妙な違和感を気にしている里崎をよそに、長谷部課長は飄々ひょうひょうと里崎を自分のペースに巻き込んでいった。

「もしたら、里崎さん。ちょっとこっちで仕事の説明させてもらいますね」

「お願いします」

長谷部課長は、里崎を事務所奥の会議机まで連れていくと、早速、実務的な話を始めた。

「そうそう、里崎さんは事務屋さんだから、まずは児童福祉司の免許を取ってもらわなきゃいけないのよ」

「ジドウフクシシ？」

「児童福祉司っていうのはね、クライアントの相談を受ける人のことで、いわゆるケースワーカーってやつ。それでね、仕事をしながらで忙しいんだけど、今年度は、二か月に一度レポートを提出してもらって、最終月に一週間のスクーリングとテストを受けてちょうだい。テストに受か

れば、晴れて児童福祉司ってわけ。だからまずこの通信教育の申込書から書いてくれる」

その説明を聞いて里崎は少し不安になった。

「あの、長谷部課長、ここで僕がする仕事って、事務屋の僕じゃ普通にできないような仕事なんですか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。みんな同じことやってるから、誰に聞いても教えてくれるし、心配ない心配ない」

「でも、ジドウフクシシとかいう免許がないといけないんですよ」

「ああ、形だけ形だけ。実際の仕事に関係ないから。気にしない気にしない」

里崎は長谷部の軽やかな、いや、軽やか過ぎる口調がとても気になった。何か裏があるように感じずにはいられない。

「じゃあ、仕事の説明しようかな」

「あの課長。課長が説明するんですか？ 前任者から引継書を使って説明を受けるんじゃないんですか？」

「ああ、そうか。里崎さん事務屋さんだから、ずっとそういうスタイルの引き継ぎ受けてるのよね。うちは、引継書とかはないのよ。前任者も、南部子ども家庭センターに異動になってしまっで、こっちに来られないし。引き継ぎはクライアントごとに作ったケースファイルを使うんだけど、そのあたりは後で説明するから。いいかな？」

「あ、はい、結構です」

「里崎さんは、児童相談所の業務ってどんなものか少しでも知ってる？」
 「すいません、全く知らないんです。観光課で周りの同僚に聞いてみたんですけど誰も知らなく
 て」

「あらそう。同じ県庁なのに。ちょっとうちも認知度上げていかなきゃ駄目ね。ただでさえ人手
 不足なのに。知られてないんじゃ誰も希望してくれないものねえ。まあまあ、それはそれとして。
 そうね、一言で言うと、児童相談所の仕事っていうのは、十八歳未満の子どもに関するあらゆる
 相談に乗っていく仕事なのよ」

えらく漠然とした仕事だと里崎は思った。

「子どもに関するあらゆる相談ですか？」

「そう。子どもの相談っていてもいろいろあってね。たとえば、体に障害がある子どもの相談
 とか、知的な発達に障害がある子どもの相談でしょ、発達障害の子どもに、不登校、非行、それ
 から、最近の児童相談所はほとんどこればかりやってる印象なんだけど、虐待ね。ともかく十
 八歳未満の子どもと、その親からの相談にはなんでも応えるのがうちの仕事なのよ。わかった？」
 「はい、なんとなく。あの、知的な発達に障害がある子どもと、発達障害の子どもって違うんで
 ずか？」

「あ、鋭い。違うのよ、これが。知的な発達に障害があるっていうのはいわゆる発達遅滞のこと
 で、発達障害っていうのは、自閉症スペクトラム障害とか、LD、ADHDなんかがそうで、脳
 の構造上、一部に問題があるために起こる障害なのよ」

「と、とりあえず違うんですね……」

「まあ、耳慣れない言葉ばかりでわかんないと思うけど、この辺は判定係長が詳しいから、また、
 おいおい教わったらいいわ。ほら、あそこに座ってる眼鏡をかけた男の人。司馬さんっていうの
 よ」

長谷部の視線の先に目をやると、白髪混じりで、黒縁の眼鏡をかけた男が、知的な雰囲気ききに包
 まれ、書類に目を落としているのが見えた。

「見るからに学者って感じでしょ。この業界では意外に有名な人なのよ。本なんかも書いたりし
 てる」

「そうなんですか。聞いたことない言葉が多くてよくわからないので、おいおい教えてもらおうこ
 とにします。それから、そういう相談っていうのは電話がかかってきて、電話で相談に乗るんで
 すか？」

「もちろん最初は電話がかかってくるんだけど、電話では予約をするだけよ。実際の相談はセン
 ターに来てもらって、面接室で行うのよ。ほら、廊下の先の両側にいくつも部屋があるのが見え
 るでしょ。あれが面接室。うちには七つ面接室があるけど、大体いつも埋まってるわね」

面接？ 何なんだ面接って。

里崎は予想だにしていなかった業務内容に動揺した。

「あの、面接って僕もやるんですか？」

「もちろんよ」

もちろんじゃない！

里崎は心の中で語気を強めて言った。

「面接とやってやったことないんですけど。大丈夫なんですかね？」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと研修体制もできてるし、面接についてはロールプレイも研修の中でやるから、すぐに上達するわよ。それに、最初の半年ほどは、さっきの眼鏡の判定係長か、こっちの、相談係長の中山さんが同席するから心配ないわよ。ちょっとコーヒーでも入れようか？ お菓子とか食べる？」

「すいません、お願いします」

「甘いもの好き？ ケーキとか？」

「大好きです」

「ほんとー！ 里崎さん、うちの事務所向きだわ」

「甘いもの好きだと、児童相談所向きなんですか？」

「そうよ」

「どうしてですか？」

「どうしてでも」

「……」

「じゃあ、コーヒー入れてくるからちょっと待ってて」

「はい」

大きめの会議机に一人ぼつんと取り残された里崎は、静かにコーヒーを待つ間、少し心が落ちて着いてきたのか、次第に周囲の状況に気を配れる余裕が出てきた。

冷静に観察すると、この事務所やたらと電話が鳴ってるな。ひっきりなしって感じた。それ

に、あの人、俺が来たときからずっと電話で話してるよな。もうかれこれ、一時間近いんじゃないかな。何を話してるんだらう？

そこで、里崎は気になっていた周囲の人たちの長電話の内容に聞き耳を立ててみた。

「だから、校長先生、さっきから申し上げてるとおり、児相への通所歴もない子どもを、学校のガラスを割ったからって、いきなり一時保護なんてできないんですよ。本人も親も児相に相談する気はないんですよ。ですから、どうしてもおっしゃるなら、学校から器物損壊の被害届を警察に出してくださいよ。そしたら、うちに児童通告が来ますから、うちで指導しますよ。職権の一時保護なんてできるわけじゃないでしょう。虐待じゃないんですよ……」

*

「はい、はい、そうですか。じゃあ、お母さんは息子さんが学校で席に座っていることもできないぐらい活発なことを心配してらっしゃるんですね。わかりました。うちのセンターで、発達検査ができますが、どうされますか？ ええ、希望されますか。それでは、検査の日程を調整させていただきますので、お母さんのご都合のいい日を教えてくださいませんか……」

*

「うん、うん、それでお母さん、どうして今日は手首切っちゃったの。最近やってなかったよね。何かしんどかったの？ ああ、そう。バイト先の人間関係で悩んでるんだ。なるほどねえ。今、子どもたち周りにいないよね。子どもの前で切ってるわけじゃないよね。お母さん偉いよ。そうやって子どもに見せないように気を使えるようになったものね。偉いよ本当に。深く切ってない

よね。そう、大丈夫ね。ストレス溜まって手首傷つけるなんて誰だってやるんだから、落ち込む必要ないよ。じゃあ、子どもたちが帰って来るまでにはちゃんと綺麗にしとこうね。それでどんなことで悩んでるの。うん、うん……」

里崎は聞こえてくる電話の内容に耳を疑った。電話をしている女性が、時折優しそうな笑顔を見せることも、里崎には異常に思えた。

手首を切ったってなんだよ。自殺しちゃうんじゃないのかよ。こんなやばい話なのに、あの人なんてあんなに明るく受け答えしてるんだ。手首切ってる人間に「偉いよ」って褒めてどうすんだよ。電話で喋ってる前に救急車呼ばなくていいのかな。血が止まらなくなったたらそれこそ死んじゃうんじゃないのか。そしたら、責任問題だぞ。

里崎は、強い不安と危機感に包まれた。

そこへ、柔らかい笑顔を浮かべた長谷部課長が、コーヒーを持って戻ってきた。

里崎は、慌てた様子で、長谷部課長に切り出した。

「あの、長谷部課長」

「何、どうしたの」

「ちょっと、あそこの女の人の電話が聞こえちゃって。なんか、相手の人が手首を切ってるみたいなんですけど、救急車を呼ぶとか、見に行つて病院に連れていくとかしない方がいいんですか？」

「あら、里崎さん、耳ざといわねえ。聞こえちゃった。もう、やあねえ、来たばかりの人にああいう電話聞かせちゃって。もう少しポリューム落としてくれればいいのに。まあとにかく、大丈夫

夫よ」

「え、でも手首とか切ったら大変じゃ。それにあの人、手首なんてみんな切るから気にすんなみたいなこと言っちゃったけど、人間、手首をそんなに簡単に切るもんですか？ 失礼かもしれませんが、ちょっとあの人の感覚って普通とずれてると思うんですけど」

里崎は慚然とした表情で長谷部に迫るように言った。

「もちろん、普通の人は簡単に手首切ったりしないわよ。ちょっとストレスがあつたぐらいでみんなが手首切つたら、献血できる人誰もいなくなっちゃうわよね。でもね、本当に大丈夫なのよ。今電話してる女性は緑川っていうんだけど、かなりの強者よ。年は里崎さんよりずっと若いから頼りなく見えるかもしれないけど、もう四年目のベテランなの」

「ベテランなら余計にあの対応はないんじゃないですか！ 大変なことになる前に動かないとー」

里崎はさらに語気を強めて言った。

「緑川さんはね、電話で話してるお母さんと、もう三年の付き合いになるの。だから彼女はわかっているのよ、お母さんがどんな精神状況かかってことが。確かにあの二人の電話のやり取りを聞いてると、すごく違和感を持つと思うわ」

「違和感どころじゃありませんよ！」

「でもね、兎相にはクライアントとコミュニケーションするうえで独特のスキルがあるのよ。クライアントを勇気づけたり、生活をいい方向に動かすためのね。ただ、普通のコミュニケーションとはかなり違うから、今は理解できないと思うけど。大丈夫、里崎さんもすぐわかるようになるから、心配しないで」

長谷部は落ち着いた口調でそう話した。表情はとても自信に満ちていた。

「ほんとに大丈夫なんですか？ 何かあったらいろいろ責任とか……」

「大丈夫。大丈夫だから。じゃあ、説明続けるね」

「は、はい……お願いします」

独特のコミュニケーションスキル？ 何なんだよ、それ。人間同士のコミュニケーションなんて、多少の違いはあったとしてもほとんど同じじゃないのかな。そりゃ、相手によって敬語にったり、ため口だったり、ちょっとお上品に喋ったりするのはあるけど、手首切ってる人間に、一人で切ってるから「偉いよ」って褒めるなんて馬鹿なコミュニケーション聞いたことないよ。はあー、なんかややこしい職場だな。

里崎は訳のわからない説明を平然と行う長谷部の態度に、不信と不安の念を抱いた。

その後、一時間半ほどかけて、里崎は長谷部から、児童相談所の仕事の内容や進め方についての概要説明を受けた。

児童相談所は、相談課と一時保護課、そして付属の子ども診療所から構成されている。相談課はさらに、ケースワーカーで構成される相談係と、子どもたちへの発達検査や心理テストを受け持つ児童心理司（臨床心理士や、大学で心理学を専攻していた専門職）で構成される判定係に分かれている。一時保護課は、虐待された子どもたちなどを一時的に保護する一時保護所を管轄し、付属の子ども診療所では、児童精神科医が、週二回の診療を行うとともに、一時保護している子どもたちのケアも行っている。

担当する地域はケースワーカーごとに割り振られている。人口の多い三和市内は中学校区ごと、そのほかの地域は、市町村ごとに担当が決められている。自分が担当する地域の住民から相談があった場合、ケースワーカーは判定係の児童心理司とペアを組んで相談に当たるのが基本スタイルだ。

相談に来たクライアントの情報は、すべてクライアントごとに作成されるケースファイルの中にぎっしりと詰まっており、個々のケースをどう展開するかについては、基本的には担当ケースワーカーと児童心理司に任されている。

だが、担当の独善を防ぐため、係長、課長との定期的なミーティングは必須で、ケースの動かし方や、支援の方向性がチェックされる。必要な場合には随時、支援方法を修正していくというシステムだ。

また、虐待ケースのように深刻な状況にあるものや、ケースワーカーが処遇に悩んで、判断しにくいようなケースは、所長、次長を含めたほぼすべての職員が参加する、援助方針検討会議によって合議がなされ、児童相談所としての対応方針が決定される。

つまり、児童相談所はクライアントに対して、常に組織として対応するということだ。もちろん、クライアントと直接面接し、さまざまな助言を与えるのは個々のケースワーカーである。しかし、クライアントのプライベートな生活に極端に深く入り込んでいくという業務の性質上、個々に責任を持たせるようなやり方では、その重圧でケースワーカーが潰れてしまう恐れがある。それ故に、すべてのケースに対して組織として責任を持つシステムが必要なのだ。

児童相談所は、ケースワーカーという媒体を通じてクライアントと向き合い、クライアントの要求を確認し、その要求に対する組織としての意見や助言を、ケースワーカーを通じて返してい

く。これは、強いストレスから職員を守るためのリスクヘッジでもあるのだ。

一連の説明が終わると、最後に長谷部課長から、里崎に三十件ほどのケースファイルが手渡された。これから里崎が引き継ぐケースファイルである。その中には既に次回の面接の予約が入っているものもあり、個々のケースの詳細については、面接の前日に長谷部課長から詳しく説明がなされるということであった。最初の面接は、十日後に設定されていた。つまり十日後には、面接室で里崎がクライアントと面接をしなければならぬという事実を突きつけられたということだ。

その日の午後、里崎は自分が引き継いだケースファイルを舐めるように読み続けた。そのほとんどが児童虐待に関するもので、数件の非行少年に関するケースと、子どもの発達に関する相談ケースも含まれていた。

ファイルの内容は里崎にとって恐ろしく衝撃的なものだった。そこには、里崎が信じていた家族や親子のあるべき姿など、その痕跡すら留めず、道徳や倫理観という言葉も観念も存在しないような世界が広がっていた。

里崎は底知れぬ深い深い憂鬱の闇の中に一人ぼつんと取り残された。不安に脅え、狼狽して自分の心を隠し、平静を装うのが精いっぱいであった。

一体これは何なんだ。この日本で現実起こっていることなのだろうか？ 実の親が自分の子どもを痣ができたり血を流すまで殴り続ける。食事も与えず、風呂にも入れず不衛生きわまる状況で平然と子どもを学校に送り出す。

これが、親が子どもにすることなのか？ そして何より、こういう非常識な連中を相手に、なんの知識も経験もないこの俺が面接をして、指導していくなんで、ありえない！ できるわけがない！ こんな職場で事務屋の俺が仕事なんてできるわけないじゃないか。

里崎がケースファイルの内容に驚愕し、打ちひしがれていたその時、入り口のドアが勢いよく開くと同時に、けたたましい女の高笑いが事務所に響いた。

「きゃははははは。課長、酷い目に遭いましたー。きゃはははははは」

里崎は少し驚いて高笑いの主を見た。ドアの傍には、中肉中背で栗色の髪を肩のあたりでクルクルとカールさせた、色白でかわいらしい女性が立っていた。まだ大学生の雰囲気を残した若い女性だ。

なんか、やたらテンションの高い人だけど、ここの職員かな？ 白地に赤茶けた妙な模様のブラウス着てるけど。服のセンスは微妙だな。

「あら、後藤さん、どうしたの、その服」

あ、やっぱり長谷部課長も変なデザインの服だと思ったんだ。でも、それを口に出して言ってしまうのは、如何なものか……。里崎は女がどんな反応をするのか注目した。

「きゃははははは。今日、家庭訪問したらねえ、お母さんがすごく機嫌悪いし調子も悪くて、『しんどかったら、子ども預かるうか？』って言ったら、その言葉に妙に反応してキレちゃってえ、持ってたコップを机にぶつけて叩き割っちゃったんです。それでその破片でお母さんの手のひらがザックリ切れちゃってえ、血がどくどく出てきたんだけど、その血だらけの手で子どもを殴ろうとするから、あわてて止めに入って、もみ合ったら、返り血浴びちゃってえ。きゃはははははは。」

買ったばかりの白いブラウスが……。もう、さっぱりですう」

「それで、子どもは？」

「お婆ちゃんが預かるってことになったので、送ってきました」

「お母さんは？」

「保健所のPSW（精神保健福祉士）呼んで、落ち着くまでよろしくって頼んできました」

「そう、お疲れ様。着替え持ってるの？」

「ジャージ持ってますから、それに着替えませう」

「ブラウスは一時保護課の洗濯機で洗っておくといいわ」

「はい」

里崎は二人の会話を呆然として聞いていた。長谷部は何事もなかったかのように、若干放心状態の里崎を後藤に紹介した。

「あ、後藤さん、今日から着任してくれた里崎さんよ」

「どうも、後藤です。よろしくお願ひします。いやあ、どうしよう。こんな酷い格好で。イメージBADですよ。ええ。きやはははは」

「ど、どうも、里崎です。よ、よろしくお願ひします。た、大変です。ええ……血、血……」

ここで、長谷部は里崎が少々普通ではないことに気がついた。

「後藤さん、さっさと着替えてきて！ 早く、早く！」

「はい」

「さ、里崎さん、ああいうことはめったにないのよ。私も児童相談所に長いけど、初めて見たわ、

ああいうの。ほほほ……。本当よ。だから心配しないでね。いつもいつも返り血浴びたりしない職場だから、安心してね。本当に、どうして今日に限っているのかしらねえ。普段は全然こんなことないのよ、ほほほ……」

長谷部の言葉は、もはや里崎の耳には全く入っていなかった。

変な模様だと思ったら、返り血だったんだ。時間がたったからあんな汚い赤茶けた色に……。どういふ職場なんだ、ここは。公務員が仕事で返り血浴びるってなんだよ。ああ、嫌だ。俺のスーツも返り血で真っ赤に染まるんだ。無理だ、こんな職場絶対無理だ。どう考えても無理だ。

里崎の頭の中は混乱し、何度も自問自答を繰り返していた。そして何よりも驚いたのは、自分が狼狽しているということだった。これまでの人生で自分がこれほど混乱し、狼狽した経験などなかった。この混乱をどのように收拾すべきか。今、自分が置かれている状況を整理するには助けが必要だ。そう思った里崎が助っ人として最も適任であると考えたのが、彼の人事異動をいち早く嗅ぎつけ、不可思議な電話をかけてきた、田丸だった。

そうだ、田丸に連絡しよう。田丸ならこの仕事についても詳しく知っているかもしれない。具体的な仕事の内容を彼女に教えてもらえば、きっと少しは落ち着けるはずだ。

里崎は気持ちを落ち着かせるために、できるだけ周りの電話を聞かないようにした。しかし、そうしようとするほど、里崎の耳は小声で話す職員の内容まで詳細に拾ってしまうのだった。

早くここから出たい。この場からいなくなりたい。田丸に会わなくては。田丸に会わなくては……。里崎はひたすら時間が過ぎ去るのを待った。

勤務時間終了とともに、逃げるように事務所を出た里崎は、田丸の携帯に電話をかけた。

「もしもし、田丸か。俺、里崎だけだ」

「あら、里崎君。どう？ センターの庶務は。居心地いい？」

「ええ、うん、まあ、そのこともだけけど、ちょっと相談したいことがあるんだ。急な話で悪いけど、今日、時間とってくれないかな？」

「ほんとに急ね。明日じゃ駄目なの？」

「できれば、今日がいいんだ。っていうか、どうしても今日がいいんだ」

「しょうがないわね。わかった。場所は？」

「いつもの寺町の焼鳥屋に六時半でどう？」

「三十分しかないじゃない。まったく、もう。当然、そっちの奢りよね？」

「もちろん」

里崎は、携帯電話をズボンのポケットに押し込むと、小走りに駐車場へと向かった。夕方の渋滞のせいで、約束の時間を十分ほど過ぎて店に到着した。

——続きはご購入ください。——